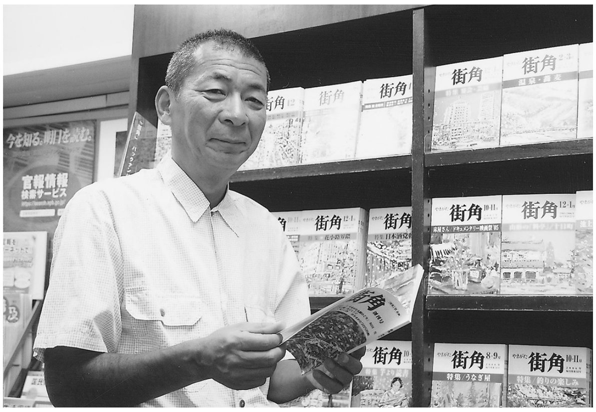
Front Line フロント・ライン

閑話独言

「やまがた・街角」から

山形商工会議所議員
五十嵐　太右衛門



「生まれ育った町に、誰しもが愛着を持っています。時の流れの変貌にあっても帰趨の想いはいささかも劣ることがないものです。人それぞれに違いはありますが、育んでくれた町の今昔のありようも省みる時であると考えます。その手立ての一つとして小冊子を創刊することにしました…」

2001（平成13）年８月、「やまがた街角」創刊にあたって編集・発行人にして、敬愛してやまなかった田中邦太郎さんの筆になる後書きです。以来、今日まで第62号となりました。企画、執筆依頼、編集と八文字屋の一室は毎回、議論が飛び交っています。

発刊への思いを私流に解釈すれば、大切にしなければならないことは何ですか、山形に住んで語り継いでいかなければならないものは何ですか、という問い掛けでしょうか。これまでに「敗戦、60年」、「3.11から」といったいわゆる硬派物の特集を編んでいますが、ごく身近な事、街のディテールを大事にしています。たとえば、山形のお祭りの由来、山形花小路界隈と花柳界のこと、料亭にまつわるあれこれ、まちかどの食堂、山形のお寺、馬見ヶ崎川の花火と釣り、山形の達人たち等々。職人業（わざ）もその一つで、「おばこの寿司」「万盛庵の蕎麦」「茨木洋服店」…。いずれも本物でした。記憶が消えない前に、と編集者が知恵を絞って記録にとどめています。山形弁で言えば、「んだっけよね」「えがったけよね」「おもしゃいけよね」という共感と郷愁です。

先代である父が他界し、跡を継いだのは私が30歳になる前でした。右も左も不案内で失敗の連続、卸屋への支払いも滞る始末でした。帰郷する前、先代と昵懇の業界では名だたる本屋に、３年の約束で見習い修行に入ったのですが、社長と折り合いが合わず１年で辞めてしまったことが災いし、辛酸をなめさせられました。もっとも、若さと、「売り上げでは絶対に上にいく」という負けん気に火をつけてくれたのですから、今は心底「恩師」と思っています。

出版という仕事に携わる人間は、建前ではなく本音で生きています。企画から作品そのものまで「（出版する）意味・価値・存在意義があるか、ないか」と丁々発止、議論します。本屋の私も思うことを大手出版社の方々に遠慮なく主張します。それで納得すれば店頭に置くのは当然として、出版社がその社運を掛けて出す、となればその意気に感じて、こちらも社員総出でとことん営業に当たります。そういう世界です。

さて、田中邦太郎さんの創刊の辞には続きがあります。以下、紹介します。

「…Ａ５判80ページ。暮らしに役立て衣食住にかかわる商店街から、風俗、文化、歴史、伝統芸術などあらゆる情報の発信地になるよう、編集内容の充実に精進致します」。

『編集内容』を『街づくり』という言葉に置き換えていかなければと思います。県都の顔、山形の臍（へそ）である七日町は、これまで多くの先輩諸氏の努力と市民の後押しで今日に至っています。が、今度は私たちの世代が、伝統を大切にしながら新たな街づくりに取り組み、「おれたちはここまでやった」と次の世代へバトンタッチすることが求められています。

「売り上げは相手（お客さん）が決める」。当たり前のことです。それには売る側（商店街）が広い視野と将来を見据えて努力していかなければならない、と痛感しています。

八文字屋　代表取締役